

デュルケーム道德論の舞台裏 —フランスユダヤ政策下のデュルケーム一家—

平 田 文 子

はじめに

フランスでは19世紀半ばまで、道德教育を主導したのはカトリック教会だった。しかし教会権力から教育を自立させ、国家主導の教育制度を確立させようとする動きが次第に高まり、ついに1882年、ジュール・フェリー（Jules Ferry, 1832-1893）による無償・義務・ライシテの三原則に基づく公教育制度が成立した⁽¹⁾。ライシテの原理に基づき世俗的道德教育の在り方に原理的な基盤を与えたのがエミール・デュルケーム（Émile Durkheim, 1858-1917）である。彼はボルドー大学、のちにソルボンヌで、教職を目指す学生たちに「道德教育」の講義を行った。その道德論は、社会の中に包摂されている制度や慣習といった集合意識を各個人に内在化させるというものである。彼は極めて社会的な産物としての制度を人類の歴史的発展の所産と見る⁽²⁾。優れた制度や慣習を共有する善良な社会は、個人を超越した存在としてその人格を陶冶する。これが彼の道德論の骨子である⁽³⁾。

日本におけるデュルケーム研究は、没後100年を迎えようとしている今日においてもなお関心が高く、これまでに枚挙に暇がないほどの研究が蓄積されてきた。しかし、彼の道德思想とユダヤ教との関係を論じている研究は未だ少ない。夏苺康男が、デュルケーム独特の社会観をユダヤ系出自との関係から論じている⁽⁴⁾。また厚東洋輔は、ラビの職務は人々を社会に適応できるように導くための「律法」解釈であるとし、デュルケームの道德教育論の底流には、ラビの家系で育ったユダヤ系出自特有の思想があるとしている⁽⁵⁾。一方、地元フランスにおいては、マルセル・フルニエ（Marcel Fournier, 1945-）が、ユダヤ教徒特有の生活体験をデュルケームが幼い頃にしてきたことに注目し、彼の人生、生き方、著作の中には、まだ多くの検討すべき点が残されていると指摘している⁽⁶⁾。

エミール・デュルケームは、8代続くラビの家系に育ち⁽⁷⁾、幼いころから父親のモイーズ（Moïse Durkheim, 1805-1896）から、ユダヤ經典に基づく宗教教育を受けていた⁽⁸⁾。幅広い知識を持つ教養人として知られていたモイーズの宗教教育は、義務を重んじ責任の意識を培うことに重点を置いたものであった⁽⁹⁾。エミールの祖先は中世以来フランス東部に入植し、アルザスに定住したユダヤ教徒である。このアルザスとエミールが生まれたロレーヌ地方は、フランスでも独特の文化圏を形成してきたため、ユダヤ政策においても他の地域とは異なる差別的な扱いを受けていたことでも知られている。そのようなユダヤ教徒特有の生活体験をデュルケームが幼いころにしていたことは、ライシテに基づく道德教育に原理的な基盤を与えたという彼の功績に新しい視点を投げかけることとなる。本稿

では彼の道徳思想とユダヤ系出自との関係を紐解くための第一歩として、フランスによるユダヤ政策下のデュルケーム一家に注目する。さらに、今までデュルケーム研究において、あまり取り上げられることがなかったアンティセミティズムに関するアンケートへのデュルケームの回答を解釈し、彼がフランスに求めた国家としての共同体の在り方の一端を明らかにする。

1. アルザス・ロレーヌ地方の地理的環境とユダヤ教徒

ライン川左岸に位置するアルザスは肥沃な土地がもたらす豊かな農産物、鉄、石炭などの地下資源に恵まれている。ドイツに隣接するこの地域はヨーロッパの中心に位置し、国境沿いのライン川を始め、有数の可航河川によってヨーロッパ通商圏につながっていた。そのため古くから交易が発達し、通貨の交換や通訳の必要性が生じていた。民族離散の歴史を持つユダヤ教徒は古くから行商、両替商、交易の仲介役といった仕事に就く者が多く、アルザス・ロレーヌ地方のこのような地理的条件は、彼らが生活の糧を得るのに適した環境にあった。特にストラスブール、ナンシー、エピナールといった都市部においては、彼らが生計を立てやすい環境にあり、このことが大きなユダヤ教徒コミュニティが存在していた理由の一つでもある。また、アルザスで使用されているアレマニア語は一般にドイツ語の一方言と見なされ、この地方はドイツ的な文化を有することで知られている。アルザスの首都ストラスブールは、元々、神聖ローマ帝国下において、独立した造幣権と外交権を有した一つの国家としての権利を整えていた⁽¹⁰⁾のに加え、この地方の領有権が時にはフランス、時にはドイツに渡るという複雑な歴史を持っていた。

2. ユダヤ教徒解放からナポレオンのユダヤ政策まで

フランスのユダヤ政策において大きな転機となったのは、1789年のフランス革命である。革命の理念の一つである「平等の原理」は、宗教の別なくフランス市民としての平等な権利が与えられることを意味する。パトリック・ヴェイユ（Patrick Weil, 1956-）は、革命後のユダヤ教徒解放の過程は二段階に分けられるという。まず、1790年1月28日のデクレ（décret）⁽¹¹⁾によって、ポルトガル系、スペイン系のユダヤ教徒と、アヴィニョンのユダヤ教徒にフランス人と同等の市民権が与えられた。翌年の1791年9月27日のデクレで、市民の誓約に同意をしたフランス国内のすべてのユダヤ教徒に市民権が与えられた⁽¹²⁾。アルザス・ロレーヌ地方のユダヤ教徒は、後者の段階で市民権が認められた。今まで見逃されてきた商取引上の例外⁽¹³⁾が中断され、20歳から25歳のすべてのユダヤ教徒男性に兵役の義務が課せられた。住居地の移動も自由となり、王国内に居住して5年経過した後には不動産も獲得できた。政策上は、あらゆる職業に従事する自由とキリスト教徒と雇用・被雇用関係を結ぶことも可能となった⁽¹⁴⁾。

宗教の自由については、1801年の政教協約（concordat）⁽¹⁵⁾が重要である。プロテスタント二派（カルヴァン派、ルター派）に信教の自由が認められながら、ユダヤ教に対しては信教の自由を認めなかった。第一帝政期の1806年に、第一回ユダヤ教徒名望家会議（l'Assemblée des Notables juifs）が

開かれ、ユダヤ教の戒律に関する 12 項目の質問がナポレオン（Napoléon Bonaparte, 1769-1821, 在位 1804-1815）によって提示された。ユダヤ教徒がフランスの法に従い、民法典のあらゆる規定に従う義務を受け入れるかどうかを見極めるためのものであった。例えば、ユダヤ教徒の離婚やラビの選任については、フランスの法律と食い違うことはないかといったものや、ユダヤ教徒とカトリック教徒の結婚は可能か、ユダヤ教徒の經典は金貸し業を奨励しているのか、ユダヤ教の戒律は異邦人には高利な貸し付けを行うように定めているのかが問われた⁽¹⁶⁾。利子取得を問題とする根拠は、旧約聖書「申命記」の「外国人には利子を付けて貸してもよいが、同胞には利子を付けて貸してはならない」⁽¹⁷⁾にある。周知のとおり、旧約聖書はユダヤ教の經典であるとともにキリスト教の經典でもある。ユダヤ教徒のみに「異邦人への利子」についての説明を求めたことについては宗教的な事情があり、6 節で述べることにする。要するに、中世以来長く続いてきたユダヤ教徒への「悪徳商売」「守銭奴」という中傷に対して、正確な情報をもとに整理しようという意図があった。その一方で、おそらくその真意は、非ユダヤ教徒からの反発を懐柔することで、ユダヤ教徒を市民に組み込み、富裕なユダヤ教徒から税収と兵力を確保しようと図ったと考えられる。

ユダヤ教徒名望家はこれらの質問に丁寧に回答した。まず、ユダヤ教の戒律とフランスの法とは食い違うことはないということが示された。また、ユダヤ教徒とカトリック教徒の結婚に対する回答については、「我々は、ユダヤ系出自者とフランス人との混血を促すために両者の結婚を増やしたいと願っている。それ故に、ユダヤ教徒とカトリック教徒の結婚は決して禁じられるものではない」と回答している。また、貸し付けに関する質問には、「ユダヤ教の戒律は金貸し業を奨励するようなことはないし、商業取引において異邦人から利益を引き出すことは自由であるが、しかしそれは過度な利益であってはならないということが確認されている」と述べている⁽¹⁸⁾。

この後、1808 年 3 月 17 日のデクレにより、長老会の設置と（10 年の期限付き）「恥辱令」（*décret infâme*）が発令された。恥辱令という名称は、オー＝ラン県とパ＝ラン県の、いわゆるアルザス地方のユダヤ教徒だけを対象とし、他の地域のユダヤ教徒はこの法の対象外だったため、アルザスのユダヤ教徒にとって恥辱的な法令だったことに由来する。この法による規制としては、「県知事が発行した免許状を持たない限りユダヤ教徒はいかなる商行為もできない」、「兵役代理人を立てることは認めない」といった例を挙げることができる⁽¹⁹⁾。アルザスのユダヤ教徒は、中世以来、他の地域のユダヤ教徒とは違った「危険な存在」という記憶が刷り込まれてきた。「アシュケナージュ」（*Ashkénaze*）⁽²⁰⁾という、この地のユダヤ教徒に付けられた呼称は、他の地域のユダヤ教徒と区別するために用いられた⁽²¹⁾。幼い頃この地で暮らし、この地方の地誌に詳しいクロード・ヴィジェ（*Claude Vigée*, 1921-）は「アルザスのユダヤ教徒は他の地域のユダヤ教徒からも下等な存在とされていた」⁽²²⁾と述べている。アルザスのユダヤ教徒自身、この呼称を侮辱的な言葉と捉えていた⁽²³⁾。

3. ユダヤ教徒の名前に関するデクレから 19 世紀半ばまでのユダヤ政策

1808 年 7 月 20 日のデクレでは、ユダヤ教徒の名前について規定された⁽²⁴⁾。伝統的にユダヤ教徒の名前は、旧約聖書の人名や出身地の村の名前、あるいは独立した名前をもたないというようなことも多かった。このデクレは、ユダヤ教徒の名前をフランス風に改めるように強制した。川崎亜紀子によると、このデクレの主な目的は、同一の名前を極力少なくすることで管理を徹底し、ユダヤ教徒の兵役逃れをなくすことにあった⁽²⁵⁾。その後 1818 年に「恥辱令」が失効し、1829 年にパリでラビ学校が創設され、1831 年に国家からラビへの俸給が支払われるようになり、1846 年にモール・ジュダイコ（more judaïco）⁽²⁶⁾が廃止され、ユダヤ教徒の同化政策は着々と進められていった⁽²⁷⁾。

同化政策を背景として、19 世紀の半ば以降、ユダヤ教徒たちの都市部への移動が見られるようになった。伝統的なカトリック思想の根強い農村部においては、制度がいかに変化しても、ユダヤ教徒に対する根強い偏見が残っていた。そもそもユダヤ系出自で農業に従事する者はほとんどいなかった。当時のユダヤ系出自者の職業は、行商、金貸し、ごくわずかに手工業技術者であった。「ユダヤ教徒解放」政策は、貧困化した農村部を離れ、より収益の見込める都市部への移住をユダヤ教徒たちに促した⁽²⁸⁾。都市部には、ユダヤ教徒たちの商業的才覚を発揮できる魅力的な環境があり、因習にとらわれない雰囲気も住みやすく稼ぎやすい環境を提供した。特に 1848 年二月革命の際にアルザスで起きた反ユダヤ暴動は、農村部におけるユダヤ教徒に対する根強い嫌悪感を明るみにした⁽²⁹⁾。この事件はユダヤ教徒の都市部への移住を促す一因ともなったと言われている⁽³⁰⁾。特に交易によって栄えたアルザスの大都市ストラスブールのユダヤ教徒人口は増加する一方であった。川崎によると、「都市には農村に存在しない職業が多くあり、土地を持っていないユダヤ人にとっては大きな魅力であった」⁽³¹⁾。ストラスブール、ミュルーズ、ナンシー、パリでは、ユダヤ教徒の若者を対象にした職業学校が 1825 年に創立されており⁽³²⁾、ユダヤ教徒を有益な職業に就かせることを目的としたこの施策は、ユダヤ教徒にも歓迎され、のちにユダヤ教徒自身も職業学校を設立していった⁽³³⁾。長い迫害の歴史を持つユダヤ教徒にとってフランスは、市民権を与えてくれた寛大な国家であったという研究者も多い⁽³⁴⁾。実際、1840 年に発行された『フランスユダヤ教徒記録集』（*Archives Israélites de France*）には「1789 年以降、我々の歴史と国民の歴史が一つになった」とか、「1793 年に讃美歌で、『我々はもはや賤民ではない』と歌った」といった記述⁽³⁵⁾が残されている。

4. エミール・デュルケームの家族とユダヤ教徒というマイノリティー

エミール・ダヴィド・デュルケームは、1858 年にヴォージュ県の県庁所在地であるエピナールで生まれた。上述のように、8 代続くラビの家系であったと言われている。エミールの祖先は中世以来フランス東部に入植し、アルザスに定住したユダヤ教徒である。エミールの洗礼名（ヘブライ語）の「ダヴィド」の名前は、祖父の名前を受け継いでいる。エミールの祖父の時代、先に述べた 1808 年 3 月 17 日のデクレによってフランスの市民権を得た。同年 7 月 20 日のデクレにより、それまで

の名前を捨て、アルザスの街の地名を取り、Turkheim (Turckheim)⁽³⁶⁾と名乗った。TurkheimはDurkheimと綴られた⁽³⁷⁾。エミールの父親のモイーズは、ヴォージュ県とオート＝マルヌ県の祭司としてエピナールに移住した。エピナールにシナゴークが創設されたのは1863年、モイーズはその祭司を務め、エピナールの比較的大きなユダヤ教徒コミュニティの中であってラビとして重要な役割を果たしていた⁽³⁸⁾。母親のメラニー (Mélanie Isidor, 1820-1901) は、馬を売る商売をしていたユダヤ教徒の家庭に育った⁽³⁹⁾。

エミールの両親は、積極的にフランス人として同化することを望んでいたという事実がある。モイーズは元々アルザスの生まれで、ドイツ的な文化の中で育った。しかしエピナールに移ってからは、ラテン文化に親しみ、アルザス特有の訛りを残しながらもフランス語を話していた。メラニーは二人の息子に 'Félix' と 'Émile' というようにフランス語の名前をつけることを望んだ。またメラニーは、Durkheim という姓名にしても、フランス語による発音を主張し、ドイツ語的なデュルカウムではなくむしろ 'e' を短くして「デュルクム」と発音していた。更に町の人々に、'c' を入れた 'Durckheim' と記すことがないように頼んでいた。また、ユダヤ的な伝統からの脱却も考えていた。ユダヤ教徒に特徴的な服装をやめ、モイーズは髭も剃っていた。1792年から行われた恐怖政治の時、アルザス地方に限り許されていた自由度の高い地方自治体制は廃止され、服装や言語のフランス化が強力に推し進められていた。エミールの祖父の時代のことであり、一家は生きるために同化の道を絶えず模索していたのであろう。また、モイーズは礼拝においてもキリスト教的礼拝を取り入れたり、信仰的な修正を行ったりすることもあった⁽⁴⁰⁾。正にフランスに適應する「ユダヤ教徒の再生」⁽⁴¹⁾を促すための教典解釈のし直しというラビの役割を誠実に果たしていた。実際この時代の『フランスユダヤ教徒記録集』に、この文集の目的は伝統を守りつつ古い信仰スタイルを積極的に変えていくための意見を収集することにあると記されている⁽⁴²⁾。モイーズに限らず当時のラビ達は、積極的な同化の道を模索していたのである。

さて、ユダヤ教徒に対する根強い偏見を育んできた要因の一つとして、ユダヤ教徒が常に歌や風刺画や伝説というカリカチュアによってレッテルを貼られてきたということがある。このカリカチュアの起源は古く中世に遡る。これは記録として残っている起源であり、実際には更に古い時代にも存在していた⁽⁴³⁾。例えば1819年に登場し、その後長年に渡って上演されたユダヤ教徒の金銭欲を嘲笑した道化芝居は、隣国のドイツでは圧倒的な観客数であったという⁽⁴⁴⁾。制度が変わっても、カリカチュアの記憶が塗り替えられるものではない。エミールも幼少期に歌や語りによる嫌がらせを受けていた⁽⁴⁵⁾。豚のお乳を飲むユダヤ教徒の絵は代表的なカリカチュアの例である⁽⁴⁶⁾。

言うまでもなく、様々な迫害や殺戮の歴史を見れば、ユダヤ教徒への差別的な行為がいかに残虐なものであったかは明らかである。アルザス地方に限って言えば、例えば先に述べた1848年の反ユダヤ暴動、この時にユダヤ教徒の多くの家屋が焼き払われた。中世に遡ると更に悲惨な事件の記憶が呼び起こされる。1349年、当時流行していたペストは、ユダヤ教徒が井戸に毒を入れたからだという噂から、ほぼ千人のユダヤ教徒（女や子どもも）がストラスブール近くの村に連行され殺戮され

た⁽⁴⁷⁾。カリカチュアによって刷り込まれた記憶は、集合意識となり、残虐な行為を無自覚に引き起こす要因ともなる。ユダヤ教徒の積極的な同化の行為は、生き残るために必死に記憶を塗り替えようとしていた行為だったのであろう。繰り返し述べているように、アルザス・ロレーヌ地方のユダヤ教徒への偏見は、フランスの中でも最悪であった。それでも、ドイツのそれよりはましであった。というのもドイツにおいては19世紀半ばに、ユダヤ教徒問題をめぐる議論がなされており、その議論がフランスにおけるユダヤ教徒解放とは異なる方向へと進んでいたからである。

フランスでのユダヤ教徒解放の影響から、当初ドイツでも、ユダヤ教徒を解放すべきであるとする議論がなされていた⁽⁴⁸⁾。しかし、この議論は結局、反ユダヤ感情を更に煽る結果となってしまった。一例としては、パウアー（Bruno Bauer, 1809-1882）とマルクス（Karl Heinrich Marx, 1818-1883）の論争が有名である⁽⁴⁹⁾。Roland Goetschel（1930-）によると、この論争はユダヤ教徒に対する改革運動の理論としてアンティセミティズム（antisémitisme）に大きな影響を与えたという⁽⁵⁰⁾。やがてドイツでは、軍国主義と相まって、民間レベルのカリカチュアから政策レベルのユダヤ教徒排斥運動へと変化して行ったことは周知のとおりである。

5. 19世紀ユダヤ問題とエミール・デュルケーム

デュルケームが自身のユダヤ系の出自について記した著作は非常に限られている。1899年にアンティセミティズムの現状に関するアンケートに答えたものが唯一、直接自らの出自に触れているものである。これはアンリ・ダガン（Henri Dagan, 1870-1912）が行ったフランスのアンティセミティズムに関するアンケートであった。もちろんこの背景にはドレフュス事件⁽⁵¹⁾がある。デュルケームは、1898年に執筆したドレフュス擁護のための論文「個人主義と知識人」の中で、当時のアンティセミティズムの隆起について、「現代のこの大病」⁽⁵²⁾という表現を残している。このことに対する質問がダガンによってなされ、デュルケームは次のように述べている。

アンティセミティズムという問題は1870年の戦争の時に、フランスの東部ですでにみとめられたことである。私自身ユダヤ教徒の出自をもつ者で、それ故にアンティセミティズムというものを私自身が目の前で見てきたことである。敗戦の責任が負わされたのはユダヤ教徒であった。そもそも1848年にも同じ類の怒りの爆発、否もっと暴力的なものがアルザスで起きていた。

これら類似した出来事を比較すれば、我々の目下のアンティセミティズムが社会的危機の状態の表面的な帰結であり、兆しであると考えることができる。1870年と1848年のケースは同じなのだ（1847年に非常に深刻な経済的な危機があった）⁽⁵³⁾。

つまり悪いことは全てそして常にユダヤ教徒のせいになされ、それは社会的危機に直面した時に現れるお決まりのパターンであるということを述べている。デュルケームが述べているように1848年の暴動の際には深刻な経済危機の状態にあり（この時、彼はまだ生まれていなかった）、1869年にもア

ルザスの労働状況は悪化し深刻な状況にあった⁽⁵⁴⁾。デュルケームは12歳の時に普仏戦争を体験し、この時、直に敗戦の責任を負わされる体験をした⁽⁵⁵⁾。フランソワ・ロス（François Roth, 1936-2016）は、1870年8月31日、ヴォージュ県ルミルモン（Remiremont）で起きた暴動に当時のアンティセミティズムの現象が表れていると述べる⁽⁵⁶⁾。この暴動は「宗教的な問題だ」と県の記録文書に保安官が記していることを取りあげてロスは、ヴォージュに居住していたユダヤ教徒の大半がドイツ語訛りを話すアルザスからの移住者であったことがこの暴動を起こす引き金になったと述べるのである。この暴動は、家畜商人のユダヤ教徒が帰宅している途中、町の札付きの悪党集団に後をつけられ、「打倒、ユダヤ教徒」、「ユダヤ教徒を皆殺しにすべし」と何度も罵倒されたあげくに、集団で暴行されたことがきっかけであったという。これは、社会的な不安から来る怒りののはけ口をユダヤ教徒に向けるということをよく示している事例である。

6. ユダヤ教徒と高利貸しとの関係

ユダヤ教徒の金銭欲を嘲笑するような集合的記憶は長い間受け継がれてきたものである。この「ユダヤ教徒＝金銭欲」という偏見は、宗教教義上の理由から生じたもので、その歴史は中世以前にまで遡る。ジャック・ル＝ゴフ（Jacques Le Goff, 1924-2014）は、ウスラ（usura）すなわち、「高利」というものが、ユダヤ教徒とキリスト教徒にとってどのように解釈されていたかを考察している。それによるとユダヤ教徒もキリスト教徒もウスラの断罪については尊重していた。しかし、12世紀以降の貨幣経済の発展がウスラの利用を活発にし、教会が高利の慣習化を危惧して高利を非難する説教をすることが多くなったという⁽⁵⁷⁾。こうして教会では高利貸しの仕事はキリスト教の教義上、憎むべき職業であるとされてきた。しかし当時急速に発展した貨幣経済の中にあつて、国から国へと商いをしていく行商人にとっては必然的に両替業務が生じ、差額から得る利益も生じる。それでもなお、金から得る利益に対して否定的であった教会は、両替・高利貸しの役割をユダヤ教徒に託していた⁽⁵⁸⁾。こうした事情を鑑みるとナポレオンのユダヤ政策は、ユダヤ教徒にとって汚名返上のチャンスであったと理解できる。それ故にユダヤ教徒名望家は、タルムードに金貸し業を擁護する記述がないことを念押しし、「皇帝のお眼鏡に適うように」⁽⁵⁹⁾、必死にアピールしていた。

7. フランスのアンティセミティズムに関するデュルケームの見解

デュルケームは、先に述べたアンティセミティズムに関するアンケートで次のように述べている。

ユダヤの血筋のある種の欠点というものは、それ（この狂乱じみた状況）を正当化するために引き合いに出されたのかもしれない。しかしそれは、（社会的危機の）副次的なものなのだ。ユダヤ教徒の欠点というものは、明らかな優れた資質によって補われている。そして、もしユダヤ教徒よりも優れた民族がいるとしても、それはそれで危険なことなのだ。そもそも、ユダヤ教徒は急激な速さで民族性を失っている。あと二世代で、それは実現しつつあった。

宗教が理由で起こる様々な事案というものに関しては、信仰というものが20～30年前と比べるとずいぶんと色あせたものになったことを指摘するだけで充分である。ところが、アンティセミティズムについていうと、それは過去のものとは違ったものになってしまった⁽⁶⁰⁾。

デュルケームは、ユダヤ教徒に対する執拗で過激な排斥行為の中で、ユダヤ教徒たちは民族性を失い、ユダヤ教に関わる明示的な証をいっさい表出しなくなったことを打ち明けている⁽⁶¹⁾。もはや日々の儀式を規則的に行うことでやっと信仰を守り続けている状態にあることは、彼自身が幼少期に体験した信仰生活のスタイルそのものであった。デュルケームの両親は、あらゆる機会を通して極力フランス人らしく振舞おうとしていた。名前も生活スタイルもフランス人のようにした。これはユダヤの種族が「族」を無くすことで生き残るため、ユダヤ系の出自をもつ者達がフランス人として生き残るための苦肉の策であった。デュルケームは、宗教的な事案が信仰とは別の次元で争われていること、フランスのアンティセミティズムというものが、過去のものとは違った形で展開されていること、つまり、今までのような民間レベルのカリカチュアとは異質のものに変化したことをドレフュス事件が明示しているとする。このようなことはドイツやロシアでは伝統的に見られたことだがフランスでは見られなかったと、フランスとドイツ・ロシアとのアンティセミティズムの性質の違いについて述べている⁽⁶²⁾。おそらく上記引用文中の「優れた民族がいるとしても」の件は、19世紀半ばから隆起していたトライチュケ（Heinrich von Treitschke, 1834-1896）の軍国思想⁽⁶³⁾を背景としたドイツ特有の精神構造を想起していると考えられる。デュルケームはのちに反戦運動の一環としてトライチュケの思想を批判している⁽⁶⁴⁾。

夏刈康男はこのアンケートを考察して、デュルケームがドイツ・ロシアと違って「フランスの反ユダヤ主義が歴史的、伝統的形態ではなく一時的運動である」⁽⁶⁵⁾と捉えていることを指摘している。筆者がこれまで述べてきたように、デュルケームはエピナールでの生活の中で反ユダヤ感情の集合意識を認識してきたし、それ故にフランス人として振る舞うことで非ユダヤ教徒の抱く負の記憶を拭い去るように努めてきた。これは、反ユダヤ主義を「一時的な運動」であるとデュルケームが捉えていたのではなく、むしろフランスのアンティセミティズムが、ドイツやロシアのような形態へと変化していくことを危惧しての発言であったように思える。デュルケームは、法令によって市民権を与えられたフランスのユダヤ教徒の歴史をここで台無しにしたくなかったのだ。ユダヤ教徒は、「罪の償いのための生贄」⁽⁶⁶⁾であるとデュルケームは述べている。フランスで起こる災禍の埋め合わせのはけ口となってきたユダヤ教徒は、長年の間フランスの「生贄」の役割を果たしてきたのだと、我々は解放を機にフランス人となったのだと、フランスはドイツやロシアとは違うのだと、デュルケームが言葉を選びながら訴えているように筆者には思える。

おわりに

デュルケームが述べているように当時のユダヤ教徒は、宗教の最も特徴的な性質であるはずの情念的な信仰をほとんど表出せずに、儀礼だけを頑なに受け継ぐ存在となっていた。このことはある意味純粋な信仰だけを残したとも考えられる。デュルケームは、あと二世代もすれば、他の民族との明らかな性質の差は無くなったと述べている。このことは2節の「ユダヤ系出自者とフランス人との混血を促すために両者の結婚を増やしたい」というユダヤ教徒名望家が100年前から願っていたことである。嫌われ者のユダヤの血を混血によって薄めていくこと、習慣や文化においてもフランス化すること、それは悪しきユダヤという集合的記憶をフランスから拭い去ることであった。

彼にとって「現代の大病」とは、狂気と化した集合意識であり、そこから脱却する道とは、人間の良識を目覚めさせることにあったとした。すなわち、「すべての良識ある人間は理論の上での非難に満足するのではなく、はっきりと、もっと高い意識を示す勇気を持ち、この社会全体の錯乱状態に対して一丸となって勝利することだ」⁽⁶⁷⁾と述べている。まさにフランスが、前述した「善良な社会」となることを望んでいるデュルケームの思想がこの言葉に表れている。デュルケームの著作には、幼いころから宗教教育を受けた者ならではの道德性を見出すことができる。その内実については、稿を改めて考察したい。

注(1) 伊達聖伸『ライシテ、道德、宗教学』、勁草書房、2010年、を参照。

(2) Jean-Claude Filloux, *Durkheim et l'éducation*, PUF, 1994, pp. 16-19. J-C フィュー『デュルケームの教育論』古川敦訳、行路社、2001年、26-29頁。中島道男「デュルケーム社会学における歴史学の位置とその意義」『社会学評論』33(1)、日本社会学会、1982、48-63頁を参照。

(3) Émile Durkheim, *L'Éducation morale*, Félix Alcan, 1925. エミール・デュルケーム『道德教育論』麻生誠・山村健訳、講談社、2010年。Jean-Claude Filloux, *op.cit.*, pp. 7-19. を参照した。

(4) 夏苺康男「E・デュルケームの知の形成」『社会学論叢』76号、日本大学社会学会、1979年。「デュルケームにおける社会観理解への一視座」『社会学論叢』78号、日本大学社会学会、1980年。「19世紀フランスにおけるカトリック社会学の台頭とその観念」『社会学論叢』82号、日本大学社会学会、1981年。

(5) 厚東洋輔「デュルケームと『道德の実証科学』：社会的なものの興亡（その4）」『関西学院大学社会学部紀要』115号、関西学院大学、2012。

(6) Marcel Fournier, *Émile Durkheim (1858-1917)*, Fayard, 2007, pp. 23-37. Marcel Fournier et Charles Kraemer éd., *Durkheim avant Durkheim: Une jeunesse vosgienne*, L'Harmattan, 2014, p. 7. この他にイタリアでは、Riccardo Calimani, « Durkheim et Mauss », *Destins et aventures de l'intellectuel juif en France*, Privat, 2002, p. 121. アメリカでは、Ivan Strenski *Durkheim and the Jews of France*, The University of Chicago Press, 1997.

(7) Jean-Claude Filloux, *Durkheim et le socialisme*, Droz, 1977, p. 8.

(8) Fournier, « Une éducation juive », *op.cit.*, 2007.

(9) *ibid.*, p. 26.

(10) Bernard Vogler, *L'Alsace: une histoire*, Oberlin, 1995. 内田日出海『物語 ストラスブールの歴史：国家の辺境、ヨーロッパの中核』中公新書、2009、54頁。

(11) 法令のうちの命令の一種。政令と訳される場合もある。

(12) Patrick Weil, *Qu'est-ce qu'un Français ?*, Gallimard, 2004, p. 422, note 16. 次も参照。David Feuerwerker,

L'Emancipation des juifs en France: de l'Ancien Régime à la fin du Second Empire, Albin Michel, 1976. Richard Ayoun, *Les Juifs de France: de l'émancipation à l'intégration 1787-1812*, L'Harmattan, 1997. Patrick Girard, *Les Juifs de France de 1789 à 1860: de l'émancipation à l'égalité*, Calmann-Lévy, 1976. Rita Hermon-Belot, *L'Emancipation des juifs en France*, PUF, 1999.

- (13) ここでいう商取引上の例外とは、宗教的な理由で同業者組合に加入できないユダヤ教徒は、逆に組合の規約に縛られることなく安価に品物を売ることができたことを指す。反感を買う要素となっていた。エードゥアルト・フック『ユダヤ人カリカチュア』羽田功訳、柏書房、1993年、78-79頁。
- (14) Achille-Edmond Halphen, *Recueil des lois, décret, ordonnances, avis du conseil d'Etat, arrêtés et règlements concernant les israélites*, Paris, 1851, pp. 2-12. Ayoun, *op.cit.*, pp. 21-33. Feuerwerker, *op.cit.*, p. 404.
- (15) いわゆるコンコルダ。教会と国家の関係を調整するための協定。国家が教会の立場を認めるかわりに教会を国家の制限の下に置こうとする意図がある。
- (16) Albert Lemoine, *Napoléon 1^{er} et les juifs*, Fayard, 1900, pp. 141-143. Ayoun, *op.cit.*, pp. 153-154.
- (17) 新共同訳「旧約聖書 申命記」23章20節。
- (18) Lemoine, *op.cit.*, pp. 152-178. Ayoun *op.cit.*, pp. 154-155.
- (19) Ayoun, *ibid.*, p. 157, p. 209. Halphen, *op.cit.*, pp. 42-47.
- (20) 『旧約聖書』「創世記」10章の「ノアの子孫」の「アシュケナズ」が語源。ドイツ語の「アシュケナース」(Aschkenas) は中世以降ドイツ地方を指す一般的名称として用いられてきたという。上田和夫「ユダヤ教小事典・補遺」『福岡大学研究部論集 A』9(2), 2009, 46頁。
- (21) Georges Weill, « Espaces réels et espaces imaginaires chez les juifs d'alsace du moyen âge au XIX^e siècle », *Archives Juives*, XXXVII, 2004, pp. 47-59.
- (22) Claude Vigée, *Un panier de houblon*, J. C. Lattès, 1994, pp. 92-93. Georges Weill, *op.cit.*, p. 48.
- (23) Vigée, *op.cit.*, pp. 92-93.
- (24) Halphen, *op.cit.*, pp. 39-40, pp. 48-50. Ayoun, *op.cit.*, p. 157.
- (25) 川崎亜紀子「近代フランスにおけるユダヤ人社会：アルザス・ユダヤ人の分析を中心に」早稲田大学大学院経済学研究科博士論文、2009、29頁。
- (26) ユダヤ教徒が証人として裁判所に出廷するときに嘘、偽りを述べないことを誓わせるユダヤ教徒のみに課された特別な慣行。メス豚の皮の上に立たせて宣誓することを強いられるというしばしば屈辱的な儀式が行われていた。Vicki Caron, *Between France and Germany: The Jews of Alsace-Lorraine*, Stanford University Press, 1988, p. 7.
- (27) Caron, *ibid.*, pp. 6-7.
- (28) Paula E. Hyman, *The Emancipation of the Jews of Alsace*, Yale University Press, 1991, p. 86. 川崎前掲論文、83-84頁。
- (29) Calimani, *op.cit.*, p. 118.
- (30) 川崎前掲論文、83-84頁。
- (31) 同論文、84頁。
- (32) 同論文、51頁。ユダヤ教徒のための職業学校については、第三章を参照した。
- (33) 同論文、84頁。
- (34) Fournier, *op.cit.*, 2007, p. 28. Caron, *op.cit.*, p. 9.
- (35) Cahen Samuel éd., *Archives Israélites de France*, 1840, pp. 1, 35.
- (36) オー・ラン県の Turckheim. 1675年神聖ローマ帝国の軍隊に対してテュレンヌ (Turenne, 1611-1675) が戦勝した地 (トゥルクハイムの戦い)。
- (37) Filloux, *op.cit.*, 1977, p. 8, note 6 を参照した。
- (38) Jacques Grasser, « Épinal à l'époque d'Émile Durkheim », Marcel Fournier et Charles Kraemer éd., *Durkheim avant Durkheim: Une jeunesse vosgienne*, L'Harmattan, 2014. Fournier, *op.cit.*, 2007, pp. 23-24.

- (39) Fournier, *ibid.*, p. 24.
- (40) *ibid.*, p. 28.
- (41) ユダヤ教徒解放以来、ユダヤ教徒のフランスへの同化を「ユダヤ教徒の再生」と表現した。
- (42) Cahen Samuel éd., *op.cit.*, p. 1.
- (43) Émile Reybell, « Le Socialisme et la question d'Alsace-Lorraine », *La Revue Socialiste*, XXXIX, P. V. Stock, janvier 1904, Paris, pp. 84-110. フック, 前掲書を参照した。
- (44) 同書, 274 頁。
- (45) Fournier, *op.cit.*, 2007, p. 26.
- (46) ユダヤ教徒への偏見に関しては、フックの文献の他に次の著作を参照した。ヴェルナー・ゾンバルト『ユダヤ人と経済生活』金森誠也訳, 講談社, 2015 年, 第 11 章。原著は Werner Sombart, *Die jüden und das wirtschaftsleben*, Duncker & Humblot, 1928.
- (47) Le Massacre de la Saint-Valentin, <http://www.13emerue.fr/dossier/le-massacre-de-la-saint-valentin> (2016, 4/20 最終確認)。虐殺された人数は 900 人, 当時のストラスブールのユダヤ人口 1884 人の約半分と推定されている。
- (48) ドイツのユダヤ教徒政策をめぐる論争については次を参照。植村邦彦『同化と解放: 19 世紀「ユダヤ人問題」論争』, 平凡社, 1993。神田順司「マルクスとユダヤ人問題」『立命館文学』625 巻, 立命館大学人文学会, 2012, 897-908 頁。
- (49) カール・マルクス『ユダヤ問題によせて・ヘーゲル法哲学批判序説』城塚登訳, 岩波書店, 1993。「ユダヤ問題によせて」はマルクスが 1943 年に執筆したもので, 翌年『独仏年誌』(Deutsch-Französische Jahrbücher) 創刊号に掲載されパリで公開された。
- (50) Roland Goetschel, « Juive question », in *Encyclopædia Universalis* [en ligne], <http://www.universalis.fr/encyclopedia/question-juive/> (2016, 6/9 最終確認)。
- (51) 1894 年, フランス陸軍参謀本部勤務の大尉であったユダヤ系出自のアルフレド・ドレフュス (Alfred Dreyfus, 1859-1935) がスパイ容疑で逮捕された冤罪事件。1906 年無罪判決を受けた。
- (52) Émile Durkheim, « L'individualisme et les intellectuels », *La Science sociale et l'action*, PUF, 1970, p. 267. エミール・デュルケーム, ジャン・クロード・フィユー編「個人主義と知識人」『社会科学と行動』佐々木交賢・中嶋明勲訳, 恒星社厚生閣, 1988, 207 頁。
- (53) Émile Durkheim, « Une réponse à enquête sur l'antisémitisme », dans Henri Dagan éd., *Enquête sur l'antisémitisme*, P. V. Stock, 1899, pp. 60-61.
- (54) Caron, *op.cit.*, p. 28.
- (55) Fournier, *op.cit.*, 2007, p. 32. Émile Durkheim, « L'Allemagne au-dessus de tout : la mentalité allemande et la guerre », 1915, p. 6, http://www.classiques.uqac.ca/classiques/Durkheim_emile/Allemagne_par-dessus_tout/Durkheim_Allemagne.pdf. E. デュルケーム「世界に冠たるドイツ」『デュルケーム ドイツ論集』小関藤一郎・山下雅之訳, 行路社, 1993 年, 219 頁。
- (56) François Roth, « Durkheim et la guerre de 1870 dans le département des Vosges », Fournier et Kraemer éd., *op.cit.*, 2014, pp. 247-248.
- (57) Jacques Le Goff, *La Bourse et la vie*, Hachette, 1986, pp. 24-32. ジャック・ル＝ゴッフ『中世の高利貸』渡辺香根夫訳, 法政大学出版局, 1990, 21-31 頁。商人, 銀行業の誕生に関しては, 次の著書を参照。Jacques Le Goff, Jean-Maurice de Montremy, *À la recherche du Moyen Age*, Louis Audibert, 2003. ジャック・ル＝ゴフ『中世とは何か』池田健二・菅沼潤訳, 藤原書店, 2005。
- (58) *ibid.*, 2003, p. 77-79. 同書, 2005, 139-141 頁。12 ～ 13 世紀になるとキリスト教徒も金貸し業に関わらざるをえなくなり, キリスト教徒の金貸しは「銀行」と称され正当化され, この時, 労働に支払われる代金の正当化が為されたという。
- (59) Ayoun, *op.cit.*, p. 154.

-
- (60) Durkheim, Dagan éd., *op.cit.*, 1899, p. 61-62. () 内筆者加筆。
- (61) *ibid.*, p. 61.
- (62) *ibid.*, pp. 59-60.
- (63) ハインリヒ・フォン・トライチケ『軍国主義政治学』（全二巻），浮田和民訳，早稲田大学出版部，1918～1919年。原著は Heinrich von Treitschke, *politik* I, II, Leipzig, S. Hirzel, 1899.
- (64) Émile Durkheim, *op.cit.*, 1915. デュルケームのトライチケ批判については次を参照。白鳥義彦「第一次世界大戦におけるトライチケ批判とデュルケームの国家論」『社会学評論』43号，日本社会学会，1992-1993年，436-450頁。
- (65) 夏刈康男「E・デュルケームの認識と実践的関心」『社会学論叢』80号，日本大学社会学会，1981年，4頁。夏刈前掲論文，1981年，32-33頁も参照。
- (66) Durkheim, Dagan éd., *op.cit.*, 1899, p. 61.
- (67) *ibid.*, pp. 62-63. この引用部分の一部については，「人権同盟の成立」との関係で浜口晴彦も触れている。「フランス人権同盟の成立前後」『社会科学討究』70号，1979年，34頁。